シーン2

「……あ、勇者くん。おはようございます。とてもすがすがしい朝ですね」

「……はぁ、なるほど、村の様子がおかしい、ですか……」

「いつも通りじゃないですか。勇者くんが気にし過ぎなだけです」

「でも、迷っているものの手を引き導くのもシスターの務めですから、この前みたいに懺悔室で、吐き出してみますか？」

「キミが漠然と抱えている不安も、話してくれればスッキリすると思いますよ」

「はい？　やっぱり、変？」

「……あらあら、思ったよりも祝福が解けてしまってますか」

「ふふふ、ちっちゃくても勇者なんですね。はぁ……かわいいです」

「これはいけません、ああ、ごめんなさい、ちょっと私……我慢できそうにない、です」

「この姿の方がやはり楽ですねぇ。……あぁ、神様に祝福して頂いて信者にふさわしい姿、このサキュバスの体にして頂いたのです。とっても素敵な姿でしょう？」

「昔の私が教えていた間違った方ではなく、正しい“神様”にですよ」

「思い出しましたか？　魅了をかけてあげましたから、この場にふさわしくない動きはできない思いますが、勇者くんは何も心配することはありません。さぁ、祝福をいただくために、今日も神様に祈りを捧げましょうね」

「……この前あなたを祝福して頂いたおちんちん様ですよ。さぁ、感謝の口づけを……」

「んっ、ふふふふ。そうそう、いいですね」

「言われなくても、んっ、きちんと舌で丁寧に舐めて……あっ、祝福が薄いですが、ご奉仕をきちんと……んぁ、していけば、神様はキミを祝福してくれます、から……んふっ」

「……どうされました？　あぁ、この姿ですか？　素晴らしいですよね。実は神様に祝福して頂いたもので、私も最初は取り乱してしまったのですが、今ではすべてを受け入れています」

「こんなに素晴らしいもの、私だけが貰うのは心苦しいので、この祝福を村の皆さんに振りまいているところなんです。皆さんも最初はキミと同じように、ビックリされる方もいらっしゃいましたけど……最後はとっても悦んでくれるんですよ」

「ええ、先輩たちと一人一人、祝福して回っているんです。ですので、村の女性の方は全員ですね」

「……ふふふ、女の子もいいですが、勇者くんみたいな男の子も同じように祝福してあげるの、ゾクゾクしてとっても楽しみです」

「さぁどうぞ……んっ♡……はぁ……♡」

「あぁ、いいですね、勇者くんの唇、あっ……ふぅ、プリプリしてて気持ちいいです。私の、先走り汁の

匂いどうです？　すごく臭くて素敵でしょう♡」
「んっ……舌も、いいですよ。一生懸命舐めてくれてるのが伝わってきます。素敵ですよぉ♡」
「はぁ、はぁ♡　んっ♡……ふぅ……私、すごく興奮しちゃってるみたい♡」
「口の中、ずっと犯し尽くしたくなっちゃってるみたいで……ふふふ、私のおちんぽ様の匂い♡　こすり付けて取れなくなるくらい、勇者くんのお口でジュボジュボしたいくて、止まらないの……♡」
「私にすべて、ゆだねてくださいね。たくさんの祝福をキミに、受けさせてあげます。ふふ、キミのおちんちんくんも、こんなに元気に勃起してしまっていますね♡」
「快感をたくさん感じてくれているんですね。嬉しいです、ふふふ♡」

「じゃあ、もぉっと、気持ちよくしてあげますねぇ。どうぞ味わってください♡　今の私なら……こんなこともできちゃうんですよ？」
「ふふふ、ビックリしました？　んっ♡……はぁ♡……勇者くんのおちんちんと、私のが、ぴったりくっついちゃいました♡」
「しっぽでぐるぐる巻きにしてあげると、んっ♡……より、いい感じです。先っちょ同士をすり合わせて、人間同士では味わえない感覚を、与えてあげますね」
「きっと気持ちいいですよ。キミも気に入ってくれると思います♡」
「んぁ……あぁ♡……ふぅ♡……これ、気持ちいい、ですよねぇ？」
「シコシコすると、勇者くんが、ビクビクってしてるの、おちんちんを通して伝わってきますよ♡」
「んぅっ♡……はぁ♡　あぁ♡……ふふふ♡　体も一緒に震えてるんですねぇ♡」
「この前はこのおちんちん様が、キミのアナルを出たり入ったりしてたんですよ？　気持ちよさそうでし

たねぇ。女の子みたいに喘いじゃって、素敵だったなぁ♡」
「そうそう、女の子と言えば、村の女の子たちにもおちんちん様は好評でしたね♡　一回貫いてあげると、みなさん喜んでお尻を振るんですよ。本当に素直で可愛い子たちでした♡」
「神様の祝福を与えてもらえて、幸せそうでした。んふっ♡……キミもこれから、受けれますので……♡よかったですねぇ。快感に身をゆだねて、たくさん悶える姿はきっと、可愛いんでしょうねぇ♡」
「ふふ、ふふふふふ♡……んっ♡……ふぅ♡　あぁっ♡♡　想像しちゃいましたかぁ？　大丈夫ですよちゃんと私が導いてあげますから……」

「……ずっと、おっぱいを見てるみたいですけど、欲しいんですか？　勇者くんがしたいのなら、私のおっぱい、吸ってもいいのですよ？」
「前の神は不純でいけないことと言ってましたが、そんなことはありません♡　これも、祝福の一環ですから遠慮なく、我慢せずに、本能のままに好きにしていいんですよ。さあ……♡」

「あぅんっ♡　あはぁ♡……そんなにがっつかなくても、私のおっぱいは逃げませんよぉ♡」
「んぅ♡　むしゃぶりついちゃって、可愛い♡」
「そんなに求められると、嬉しくなってしまいますねぇ♡　乳飲み子のように夢中。なのに……勇者くんの、おちんちんはぁ、こぉんなに、パンパンに腫れあがって……♡」
「たくさんエッチな気分になっちゃったんだねぇ。おっぱい吸いながら、興奮してるんだぁ。うふふふ、いい子いい子。満足いくまでむさぼってください」
「キミがしたいことをすればいいのです。大好きなおっぱい、チュパチュパっ音を立てて吸いながら、んっ……おちんちんさんをシコシコされるの、気持ちいいですね。よかったですねー。ふふふっ♡」

「快感を受け入れてください。私の身体に溺れてください。おちんちん様の祝福を受け入れてください」
「あぁ、本当にいい子ですねぇ。頭なでられるのも、好きなんですか？　ふふ、おちんちんがビクビク跳ねっぱなしです。んぁ♡……はぁ、はぁ♡……あぁ♡　いいです。いいですよぉ♡　私も、おっぱいを好きにされて、すっごく気持ちいい♡」
「分かりますか？　ふたなりチンポがこんなに、パンパンになってきちゃいました♡　キミがあまりにも可愛らしいトロけた表情を晒すからですよぉ。……それに、そろそろ限界ですよね？」
「じゃあ一緒に射精しちゃいましょうか。んっ……はぁ、はぁ……キミにたくさんぶちまけてあげますね♡」

「射精の快感と一緒に、おちんちん様の祝福をたくさん受け取ってくださいねぇ。ふふっ♡」
「んっ……あぁ♡　んっ♡……はっ、はぁっ♡……我慢、しなくていいんですよ？」
「ふふ、可愛い……んっ♡……私と、一緒に、イきましょう？　ビュルビュルって、勇者精子くん、たくさんぶちまけましょう♡」
「んっ♡……あぁっ♡　キミの金玉、上がってきてるの、分かるぅっ♡　んっ♡……はぁ♡　はっ♡♡　んっ♡　あぅっ♡……んんっ♡　くぅっ♡……あっ♡　私のチンポもっ、んんっ、もうっ、限界……あっ♡　あぅっ……♡」
「イくっ♡イクぅっ♡……んっ♡んんんんんんんっっ♡♡♡！！！」

「んっ♡……あぁぁっ♡……あぁ♡……すごい出るぅ……んっ♡……はぁ、はぁ♡はぁ♡……はぁ……はぁ……♡」
「はぁ……ふぅ♡……ちゃんと、一緒に、イけましたねぇ♡……えらい、えらい。ふふっ……♡」

「キミにも、ちゃんと祝福の効果が出て来てますねぇ♡」
「最初のキリっとした表情なんて原型もないぐらいにとろけっちゃって。とても、キミにふさわしい顔になっちゃってます……ええ、それはよかったです。新たなる神様に、最大級の感謝を捧げましょう……」
「ふたなりチンポの祝福が待ちきれないって顔になっちゃってますね。とても、勇者候補とは思えないメスの顔ですよ♡　でも、仕方ないですよね。キミが目が離せないこのおちんぽ様、キミの中にぶち込んで祝福されるのとっても気持ちよかったでしょ」

「教会でシスターに祝福してもらうのは当然のことですから。私の祝福受け入れてくださいね」
「あらぁ……キミのアナルすっごくキュッキュって動いてますねぇ。無意識ですか？」
「ふたなりチンポ、食べたくて食べたくて、仕方ない感じなんですねぇ……エッチなお尻ですねぇ」
「そうだなぁ……だったら……んちゅっ、こういうのも、気持ちいいでしょう？」
「ちゅるっ……ちゅっ、んっ、ちゅるちゅっ、じゅちゅっ……ちゅぱぁっ……んっ♡……乳首いじられながら、お尻の穴舐められて……ちゅぱっ♡　こんなに、んちゅっ♡……反応いいと、ちゅぱっ♡　私もやる気でちゃいますよぉ……じゅるじゅるっ♡　じゅちゅっ、んっ♡　ちゅぱぁんっ♡」

「はぁ、はぁ、はぁ……ふぅ……」

「勇者くんのお顔、おっぱいにむさぼりついてたときよりも、トロットロですねぇ♡　吸うよりも、吸われる方がお好みなんですね。キミ、メス穴の素質がとても高いですよ♡」
「ええ、間違いありません。ふふふ、私の、自慢の、勇者さま、ですよぉ……」

「じゃあ、入れちゃいますねぇ♡」

「あぁ、すごく、温かいですぅ……勇者くんのアナル、すごく、気持ちいい……きつきつなのに、こんなに簡単に、おちんちん様、飲み込んじゃうんですねぇ。んっ♡　はぁ……♡」
「本当に淫乱なメス穴ですねぇ。排泄する穴なのに、入れられて、感じてるんですよ♡」
「メス穴掘られて、感じながら、キミは自分のおちんちんをガチガチに硬くしちゃうんですねぇ♡」

「あんっ♡……はぁ♡　ふぅっ♡……ふふ、私が動くたび、おっぱいにキミのおちんちんが当たっちゃいますね♡」
「さっき射精したばかりなのに、もうこんなに勃起しちゃってる……ふふふっ♡」
「あぁ、そうだ……おっぱいで挟んで、搾り上げてあげますねぇ」
「キミのメス穴アナルを味わいながら、勇者おちんちんくんも気持ちよくなれますから♡　いっぱい悶えて、可愛い顔みせてくださいねぇ……ふふふふっ♡」

「んっ♡……はぁ♡……んぅっ♡　ふぅ……ふぅっ♡……んぁっ♡……あぁ♡　おっぱいの中、おちんち

んが震えっぱなし♡　いっぱい、キミの中に、精子流し込んであげますからぁ♡　あっ♡……んっ♡……んぁっ……はぁ♡　はぁ♡　んっ♡……あぁ♡　すごい、すごいですよぉ♡」

「すっごく締まりますぅ、気持ちいい♡　気持ちいい♡……この穴、好きぃ……あっ♡　あぁっ……♡」

「私が、また、勇者くんの中に、ふたなりサキュバスせーし♡　いっぱいどぴゅどぴゅ注いであげます」

「キミを、おちんちんの付いてるメスにしてあげますね♡　よかったですねぇ……♡」

「んぅぅっ……あっ、すごいっ……んぁっ、今、すっごく締まってますよぉ♡」

「これ、気持ちいいです、すぐにイっちゃいそう、ですよぉ♡」

「キミも、もう限界みたいですね、私のおっぱい、勇者くんの我慢汁でベチャベチャです♡　ちゃんと全部受けてあげます。安心してください」

「ほら、また、一緒に、イきましょ？　メス穴アナルずぼずぼされて、女の子みたいに、感じて、喘いでシゴかれて、んっ、だらしなく、射精しちゃいましょう？　はぁ♡　んっ♡　あぁっ♡」

「ほら、イけっ、イけっ♡　イっちゃいましょう♡……はぁはぁはぁ♡……私も、たっくさん、ぶちまけてあげます、からぁ！」

「神様見ていてください！　ご頂戴したこのっ、聖根っ、ふたなりチンポで勇者くんっ、のぉ！　メス穴を祝福しますっっ♡♡♡！」

「……んんっ♡！　あぅっ♡！　んっ♡　んぅぅぅ♡♡♡！　締まるぅぅぅっっ♡♡♡！！！」

「はぁぁ、はぁぁ♡……んぅっ♡……あぁ♡　熱っい祝福汁注ぎ込まれてるの……わかります？　全部受け入れてくださいね……はぁ、はぁ……♡」

「んぁっ……キミの中、ふたなりチンポ、搾り上げられてるよぉ……はぁ、はぁ……それに、こんなに、精子も、かけられちゃいました……ふふ、たくさん出せましたね♡」
「えらいですよー、ホントに、いい子、いい子ですねぇ……ふふふふふ♡」